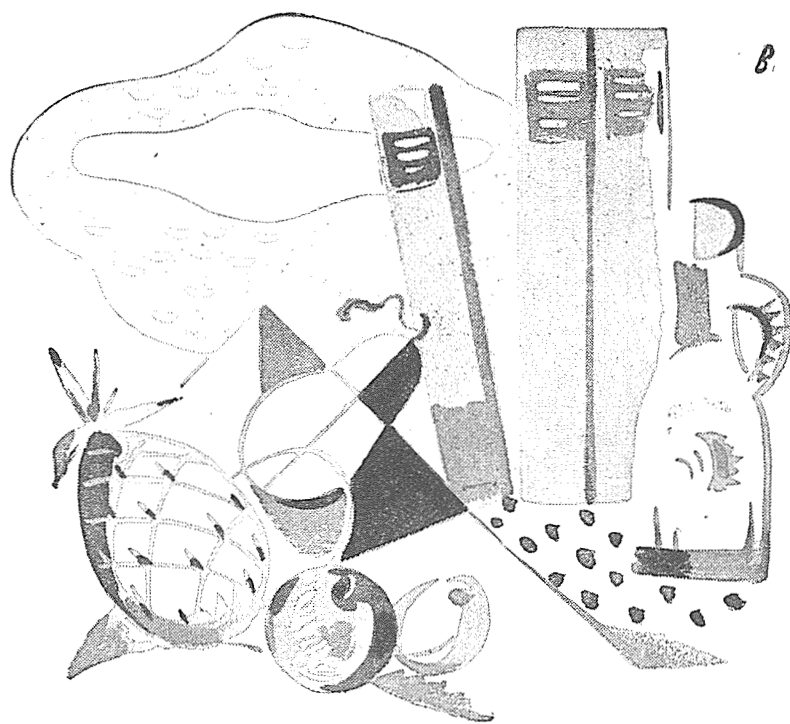


# 報學學大西哥

號二十七百第

月九年四十和昭



行發局報學學大西關

辯護士 西本寛一 著

# 新會社法論

× × ×

菊判上製 六圓五拾錢  
八百餘頁 送料 廿貳錢

戦争は兵書にない戦法を生む。それは現實死

闘の場面に直面してゐるが爲である。實際家の

書物には何かそこに云ひ知れぬ迫真力がある。

それは現實の問題にぶつかつて書かれたもので

あるが爲である。著者は十數年來會社法専門の

辯護士として、あらゆる實戦に臨んだ自己の經

験を基礎として本書を成された。そこには必ず

や現實に則した實證的の深い學理がなくてはな

らない。而も本文九ポイントベタ組七八〇頁、

その量に於ても正に既刊類書の尤である。敢へ

て推奨する。

大阪商工會議所 法學士 清水兼男 著

# 新刊

# 工業組合法

菊判上製 定價 參圓  
三六〇頁 送料 拾四錢

## ◇改正工業組合法

八月一日より實施せらる

——本書は改正法を含む最新の體系的解説書である——

戰時經濟體制下に於ける統制經濟の遂行に當り工業組合

の使命はますます重きを加へる。中小工業の生産力擴充・

時局産業轉換への積極的活動、物資統制に於ける國家的機

關としての活動には目覺しきものがある。これに伴つて工

業組合の數も三千五百を超え、その生産年額九十億に垂ん

とするの勢である。しかも今や事變は長期建設への段階に

入つて統制經濟のいよゝ強化せられるに及び、工業組合

の重要性が層一層加へられることは疑ない。かくの如き工

業組合の使命の重大性に伴ひ、今年工業組合法の改正が行

はれ、その統制的機能の強化と新に工業小組合の制度が設

けられるにいたつた。今や右改正法が八月一日より實施せ

られるに當り、最新の工業組合法全般に涉る詳細な解説書

を刊行して世に送る。組合關係者は勿論、苟も現時の戰時統

大振電 阪替話 北 大北 區 阪 三 一 五 梅 一 六 七 田 九 五 五 新 七 三 二 道 番 番 番

院 書 同 大

前學大央中臺河駿京東 番八三二一八京東替振 番八二二二田神話電

# 時局と學徒

法文學部長 中谷敬壽 教授

## 目次

時局と學徒……………中谷敬壽	(一)
滿洲派遣隊に参加して……………河村宜介	(三)
……………中村良之助	(六)
隨感一二……………川上敬逸	(五)
學内報……………	(一〇)
第二學期始業—勸語奉戴—語學講習會終了 集團勤勞作業實施—與西青年勤勞隊國際歸 學—學部教練用銃器拂下—軍務公用者氏名	
校友……………	(二)
大連支部—東京支部—新京支部—宣撫班與 西醫—五級會—會員消息	
戰線だより……………	(一五)
學生彙報……………	(一七)
校友會費拂込者氏名(七)……………	(一九)

いはゆる國家總力戰こそ近代戰の特質とするが、之を實證したものは光の世界大戰であつた。從て今日戰時國家にとつて國家總動員法の必要なことは更に疑ひのないところである。昨春制定公布されたわが國家總動員法も今や支那事變第三年に入るに及んで、殆ど文字通り全面的發動を見るに至つた。蓋し、支那事變の戦局は殆ど極限に達し、新東亞秩序建設の段階へと躍進したが、而もその確立は實に一大難事業であつて國民全體の心からなる協力を要するのみならず、他方變轉極りなき國際情勢は今次の歐洲戰爭今後の動きについても全く豫斷を許さず、幸にして「帝國は之に介入せず専ら支那事變の解決に邁進せんとす」るのであるが、なほ歐洲の事態のわが國に及ぼす影響至大にして遽に樂觀視することを許さないものがあるからである。かくて、わが國は今後相當長期に亘り、密に戰時體制を愈々強化するの一途を辿らざるをえないのみならず、又その戰時體制も或部門においては、既に國防國家體制として恒久化せんとする兆さへ見受けられる。

こゝにおいてか、國民各自一段と正しく時局を認識し各々その分を守つて堅忍持久能く國家總動員態勢に協心戮力することこそ、支那事變窮局の目的にして帝國不動の國策たる東亞新秩序の確立に寄與する所以である。從て教育の方面においても亦大に右の精神に基き、時局に即應した努力工夫が爲されなければならぬこと勿論であるが、元來教育の事は將來國家の隆昌を双肩に荷負ひ之を永遠に確保すべき人材を養成するといふ最も根本的な恒久的國策であるから、これが經營畫策に當つては須く萬全を期し細心にして且つ遠大でなければならぬ。從て若し眼前の外形的效果のみを商量し教育事業を以て時局と無關係或は不急の事業となすがときは、教育の本質を見誤つた謬見であるか或は徒に眼光の效果のみを急ぐ性急なる短見であると云はざるをえないであらう。而して我國の教育の根本方針は夙に教育勅語に明らかに定められており、なほ大學教育の目的が眞理の探究・人格の陶冶・國家思想の涵養の三者に在ること又大學令の明定するところである。而も時局が重大なればなるほど層一層、眞理に聽從し勾高き人格を陶冶せる堅固なる國家思想の持主こそ、眞に國家社會の要求する人士でなければならぬ。加之非常時局下の本年五月二十二日、青少年學徒に賜はりたる勅語は、時局柄國民の後勁たる青少年學徒の縛ふべき所を明示せさせ給ひ、聖旨の程拜察するだに畏しこき極みである。

されば一般學生生徒は勿論これが指導育成の任に在る者も亦、齊しく脊々服膺して、聖旨に關ひ奉ることを期せなければならぬ。即ち吾々は時局の愈々重大なることを認識すればするほど、各々その本分を一段と恪守し、益々眞理の探究・人格の陶冶・國家思想の涵養に邁進することに依つて國家總動員態勢に協力し、依て以てその負荷の重任を全くせんことを期すべきである。從つて若し徒らに時局に興奮してその本分を忘れ輕躁浮華の言を爲し、以て時局に對する學徒の協力なれりとなすがときは、固より學徒の本分に悖り徒らに世人の時局認識を濁濁せしむるに過ぎない。是れこの際特に戒慎することを要す點である。(昭和一九、九、九日)。

# 興亞青年勤勞報國隊記錄

## 滿洲派遣隊に参加して

教授 河村 宜介

### 序

今夏、文部省は友邦滿洲國政府と協力して、興亞青年勤勞報國隊滿洲派遣隊なるものを組織し、一般青年並に學生生徒を大陸に派遣し、現地に於て國防建設、文化工作並に内地に於ける農業生産擴充計畫遂行上必要なる飼料等の生産を行はしめ、之等の集團的勤勞訓練を通じて興亞の精神を體得せしむることになつた。本學専門部よりも參加希望者中より五名の代表學生を選抜して派遣することになり。私は命を受けてこれら學生の指導教官として參加する光榮を貰つた。従來學徒至誠會、學生義勇軍、滿洲實習旅行團等の團體が暑中休暇に渡滿したが之等見學を主とする團體とは大に趣を異にし、此度のは全國に於ける大學高等専門學校を全部網羅せる實に大規模の勤勞奉仕團體である。尤もその組織方法等に就ては尙練精の必要が多々あるが我國としては洵に劃期的な大事業たるを失はない。私及び五名の參加學生は去る七月六日内原訓練所に入所以來八月廿日神戸着港解隊まで、約二ヶ月間極めて嚴

重なる規律訓練に服したわけである。次に報國隊の常に復唱したる興亞青年勤勞報國隊綱領を掲ぐると共に、勤勞奉仕の全貌を摘記して御參考に供する次第である。

興亞青年勤勞報國隊綱領  
我等勤勞報國隊ハ皇祖ノ神勅ヲ奉シ協心戮力  
身ヲ挺シテ興亞ノ天業ニ追進シ神明ニ誓ツテ  
天皇陛下ノ大御心ニ副ヒ奉ラムコトヲ期ス

### 編制 組織

我々學生の滿洲派遣隊は總數一七五九名（このうちには各校一名の指導教官を含む）を算す。この外に文部省教學局員八名、新聞班員八名、撮影班員五名參加す。尤も滿洲國の建設勤勞奉仕隊要綱によれば毎年青年隊を合して十萬人の隊員を招致する計劃になつてゐる。然し今年はその最初の試みで青年隊を合してもそ

の十分の一にも足らなかつた。さてこれ等の學生隊一七五九名は派遣隊長藤懸末松少將によつて指揮せられこれを三の方面隊、二の獨立隊、三の別働隊に分つて各地方に分遣せられた。

### 派遣隊本部 新京

- 第一方面隊 五八〇人 牡丹江、東寧方面
- 第二方面隊 三〇一人 佳木斯方面
- 第三方面隊 三〇二人 昂々溪方面
- 渾春汪清獨立隊 二九三人
- 黑河獨立隊 一六八人

### 獸醫別働隊

九三人（麻布獸醫專門、東京高等獸醫、日本高等獸醫を以て組織す）

### 測量別働隊

一人（三重高農一校を以て組織す）

### 採鑛別働隊

一人（秋田鑛專一校を以て組織す）

このうち三の別働隊を除いては夫々命ぜられた地方に分駐し、各方面隊は各々中隊、小隊、分隊に分たれ各隊長は臨時文部省から囑託された配屬將校を以てこれに當てられた。

各學校の參加人員は大學は一〇名、醫科系専門學校農科系専門學校も各一〇名、獸醫系専門學校は三〇名、其他の高等専門學校は五名といふことになつてゐる、別に指導教官として教職員一名附添ふ。而して我々専門部代表六名は第二方面隊に屬し第二中隊第一小隊第

二分隊に配属せられた。なほ本學關係方面について云へば大學豫科は第一方面隊に屬し（河村信一教授指導す）牡丹江に派遣せられ、大學部配属將校平尾末吉大佐は第三方面隊長として昂々溪に向ひ、滿洲三方面に分駐することになつたわけである。

行程

内原に於ける準備訓練  
我々の出發から歸還までの全行程は約二ヶ月に亘りそのうち内原に於ける準備訓練は七月六日から二十日までの二週間である。

内原訓練所は茨城縣東茨城郡下中妻村内原にあつて常磐線内原驛から東約二キロの松林の中にある。滿蒙開拓青少年内原訓練所がそれである。こゝは大陸への夢と憧れに燃え立つて全國から集る十六歳から十九歳までの青少年が渡滿前まづこゝの兵舎に收容せられて軍隊同様寧ろそれ以上の嚴然たる規律の下に二ヶ月乃至三ヶ月の訓練を受ける所である。我々指導教官は學生より一週間早く七月六日に入所し、次の日課の下に内原特有の訓練を受けた。

訓練日課

午前  
五、三〇——六、〇〇 起床 點呼 洗面  
六、〇〇——七、〇〇 中隊集合 禮拜 日本體操 清掃  
七、〇〇——八、〇〇 朝食 休養  
八、〇〇——二、〇〇 教練 作業 講演  
午後  
一、二、〇〇——二、〇〇 晝食 休養

二、〇〇——五、三〇 作業（又は教練 講演）  
五、三〇——七、三〇 夕食 入浴 休養  
七、三〇——八、三〇 中隊又は小隊毎に談話會  
八、三〇——九、〇〇 中隊集合 禮拜 點呼  
九、〇〇 消燈

この日課を通じて特に目立つものは激しい肉體と精神との鍛練である。新しい郷土を持たんとする者には人並み以上の強靱なる心身が先づ要求される。内原訓練所は實にこの鍛練の爲めの道場である。これが爲めには同じ體操をするにしても、單に身體を機械的に動かして自然にその健康を増進するのではなく、まづ精神の禳祓を主眼として行ふ體操が行はれる。内原に於ける「日本體操」が即ちこれである。日本體操と書いて「やまとはたらき」と訓ましてある、皇國精神の實修を目的としその結果自ら身體の健康を増進せしめやうといふ體操である。古事記や、日本書紀其他の古典の精神を身體の舉動によつて體得せしめ、いつとなく惟神の光、聖國の大精神が身體の内部から輝くに至ると共に健全なる身體が得られるといふにある。これに就て寛克彦博士著「日本體操」には次の如く述べてある。

「一體身體の圓滿なる運動は常に筋肉のみが物質的に働くことのみをいふものではなく、精神の要求に應じ其の刺戟によつて生ずるものである。そこで單なる一方面にのみ拘泥することなく、凡ゆる方面の運動を秩序的に行ひ、而も奇妙なる珍らしき運動でもなく、平々凡々日常せねばならぬ運動をしてみる時には、其の中に、拘泥のない秩序ある而も常時刻々磨かねばならぬ、持つて居らねばならぬ精神を反省することが出来る。此意味に於て自覺して此運動を行ふ時には其運動の根源たる精神を自覺せしめることもなし得られる。」

一體今日普通行はれる體操は、西洋傳來のものであつて人格から身體を切り離し、肉體のみの發育や健全を目的としてゐる。然し日本體操は皇國の精神を練磨するの一の手段として、身體の運動をするもので、心持ちを主とし運動を従としてゐる。

體操の方法については之を説明する餘裕を持たないが、我々は内原生活二週間を通じて朝夕之を行ひその精神の體得に努めた。然し後述する如く滿洲に渡つてからは兵營に入つた爲めに遂に之を繼續することが出来なかつたことはかへすがへすも残念であつた。

訓練所の青少年達がやがて祖國の山野とも別を惜しんで大陸の土を開墾するに當つては何よりもこの強固なる意志信念が必要である。従つて此所では軍隊以上種々異つた訓練が行はれるのは當然であらう。

内原に於ける主なる講話

七月八日 加藤所長の講話「勤勞精神」  
 九日 陸軍省有末軍事課長「最近の陸軍」  
 外務省第四課長豊田書記官「現代の歐洲の狀勢と過去の經緯」  
 十日 陸軍省小山通譯官「歐洲事情」  
 拓務省安井拓務局長「滿洲の産業と移民事業」  
 七月廿日内原出發——東京二重橋宮城遙拜——明治神宮參拜——靖國神社參拜（代表者）同夜上野驛發——

——廿一日新潟着——同日午後出帆——廿三日羅津上陸——廿五日佳木斯着直ちに各兵營に分宿す

### 滿洲に於ける勤勞奉仕

七月廿五日午前九時我々の乗つた臨時列車が佳木斯驛に着くや日滿軍官民多數の出迎へを受けた。驛頭で三江省實踐本部長増田増太郎氏の挨拶があつて直ちに同市東南崗岩本部隊に入つた。こゝで佳木斯の紹介をすることにしよう。

### 佳木斯

佳木斯 (Jiamusi) は三江省の首都で、哈爾濱から水路松花江を下ること四〇〇軒二十三時間を要し、又牡丹江から鐵路三三三軒約十二時間、大連からは一六二九軒約四百里時間にして三十六時間を要する東北滿の邊陲の地にある。然し今では實に軍事上、交通經濟上非常に重要な都市となつてゐる。

佳木斯の名は日本では一般にチャムスと呼んでゐるが、あちらではヂヤムス (Jiamusi) と發音してゐる。この地はもと蒙古人の「江明斯」といふ人の名をとつたもので、江と佳、明と木とが同音でかく變化したといはれてゐる。滿洲事變以前は松花江に沿ふ一漁村に過ぎなかつたが、張作霖が松花江流域二十萬移民計畫を實施して以來、この附近が物資集散地と化して漸く民家の増加を見るに至つたが、住民は絶えず悪政と匪賊とに脅かされて常に安定なき生活を餘儀なくさせられてゐた。

日本人がこゝに移住するに至つたのは去る昭和七年八月依蘭 松花江の上流 地方に大水害があつた時からで、こゝに駐屯してゐた日本軍が佳木斯に移駐する

に當つて同地在留の日本人が佳木斯に難を避けたことに始まつてゐる。

現在の人口は約一〇萬に及ぼんとし (本年六月末現在市公署調) 日本人は七千五百人の多き上つてゐる。而も昭和十二年一月に僅か三萬九千人、同十三年五月に七萬三千人、今又十萬を突破せんとし全く驚異的増加を示してゐる。これによつてみても如何に此地が最近急激に發展しつゝあるかといふことがわかる。將來は哈爾濱を凌ぐとさへ云はれ、日滿人の凡ゆる必要なる文化的機關もこゝ三四年のうちに出来上つてしまつた。實際我々がこゝへ来てこんな北滿の天地にかくの如き大都市が出現してゐやうとは思はなかつた。

この佳木斯に七月廿五日から八月二十日まで滞在して軍の厄介になつた。尤もそのうち最後の一週間は兵營の都合で急に岩本部隊を出て街はづれの南崗大街南端同和自動車株式會社の新築車庫に移轉した。

### 奉仕作業の内容

勤勞奉仕作業の内容については各方面隊によつて多少の相異があつたやうであるが、我々第二方面隊三百一人の受持つた作業は道路の建設、兵器被服の開梱手入等であつた。このうち道路の構築はその主なるもので佳木斯の近郊東南崗と西南崗にある兩兵營の間に幅員約十米延長七五〇米の道路を作る作業の基礎工事を完成した。而もこの作業は百三十度の炎天下に所謂大陸に汗を流して行ふのであつてかなり骨の折れる仕事であつた。大體次の日課の下に一ヶ月間繼續した。

### 午前

五、〇〇——六、〇〇 起床 中隊毎に 點呼 遙

拜 國歌奉唱 默禱 體操  
六、〇〇——七、〇〇 清掃 朝食  
七、〇〇——八、〇〇 作業出發準備  
八、〇〇——二、〇〇 作業

### 午後

一二、〇〇——一、三〇 晝食休養  
一、三〇——五、〇〇 作業 (歸營時間を含む)  
五、〇〇——七、〇〇 入浴夕食 洗濯  
七、〇〇——八、〇〇 休養  
八、三〇 點呼

この間軍隊と同一規律の下に給與を受け、勤務に服し第一線將兵と勞苦を共にすることを得た。夜間は勿論燈火管制下にあつたが北滿洲は八時頃まではまだかなり明るいので餘り痛痒を感じなかつた。

丁度作業も大半終了した頃、澤田〇〇團長が親しく作業場に來て厚く感謝の意を表せられ學生の作つたこの道路は何れ完成の暁にはこれを記念する爲めに適當の名稱が附せられるとか聞いた。又兵器被服の開梱手入作業も夫々の作業場に於て行ひ、こゝでも兵器部長が心から感謝の意を寄せられた。

愈々佳木斯出渡の直前澤田〇〇團長はその豪傑と共に特に我々指導教官四十一名の爲めに佳木斯市軍人會館に於て一夜盛大なる送別の宴が開催された。

### 歸還

八月二十一日午前九時十分佳木斯發日滿軍官民の盛大なる見送を受ける——二十二日午前八時哈爾濱着 濱江省歡迎式後自由見學、午後七時發——二十三日午前八時二分新京着新京神社參拜、植田關東軍司令官關

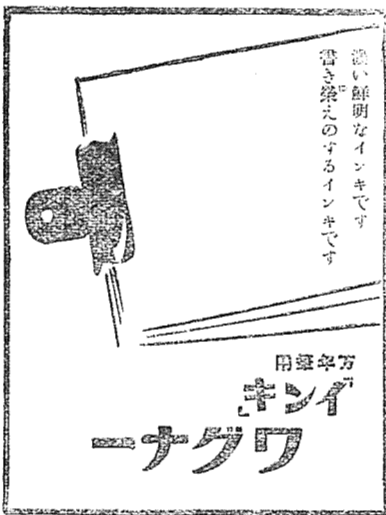
兵正午國務院前にて表彰式、感謝狀及紀念章授與四時より五時まで驛前にて面會、六時發車——同夜奉天通過——二十四日午前九時半大連着直ちに旅順に向ひ午後一時旅順着白玉山登攀二時解散自由見學、六時集合七時半旅順發九時半大連驛着、十一時乘船船内一泊——二十五日朝食後十一時迄大連見學、午後二時出帆——二十九日午前三時神戸入港同夜船内一泊三十日午前十一時上陸東遼園地に於て殉職學生慰靈祭及び解散式舉行午後四時解散

### 感想

以上はこの度の滿洲に於ける勤勞奉仕の概略を述べたに過ぎないが次に些か私の所感を附加しておこう。第一に参加學生が終始よく眞面目に熱心に作業なり勤務に服したといふことである。これは勿論當然なことではあるが慣れない時候と遠境との下にあれだけの成果を修め得たことは流石に非常時下の學生ならこそと洵に敬服させられた。形の上に表はれた勤勞の結果は勿論であるが無形の精神的効果は實に偉大なものがあつたと思ふ。千載一遇の誠に得難い貴重な體驗を得て歸つた個人は勿論、國家的見地からみてその成果の影響する所は極めて大なるものがあつた。派遣隊長の話にソヴエットもこれを聞いて日滿兩國の餘裕綽々たる状態に大いに恐れをなしたとか。たゞ本年は最初の試み故種々の點に統一を缺いて弊からず不便を感じたことは遺憾であつた。これは來年度からは何れ改善せられることと思ふ。次に全期間を通じて病人が意外に多かつたことも遺憾の一つである。總べてものの鍛練には必ず若干の犠牲は伴ふものである。殊に滿洲も

本年は例年に無く早天續きで、暑熱も厳しかつたから無理もないがこれも來年からは今少し對策が考究されなければならぬ。當局の御一考を願ふ次第である。尤も我關西大學專門部參加學生のうちには最後まで一人の病人事故者の無かつたことは洵に御同慶に堪へない。次に滿洲各地で多數校友諸氏の御歡迎を頂いたこと特にこの機會に衷心より感謝の意を表しておく。たゞ折角の御厚意も時間の關係で十分にお受けすることの出来なかつたことを洵に遺憾に思つてをる。

最後に滿洲の天地は想像以上に住みよいところ、時候も決して悪くない、少くとも若い者の活動し甲斐のあるところ、青年の天下であり若人の滿洲であるといふことを感ぜられた。而もかねて我國の大體政策の根本的解決策は、結局その好むと好まざるを問はず、多數の日本人が滿洲に出かけるより外致方がないといふことを聞いてゐたが、この度の汗の體驗によつてつくづくこの感を深くした。



## 隨感 一一一

教授 川上敬逸

三日、ドイツ政府は正式に英佛の最後通牒を拒絶した。ソラ！大戦の火蓋は切つて落された。時間の切れ目は縁の切れ目といふだけならまだいい。何しろ、小にしてはポーランドの破國であり、大にしては白人の自爆なのだ。人のさむぐの無理はない。

刻一刻！日本の電氣時計は響くことがあつても、歴史の針には統制はないものとみえる。時に、西曆一九三九年九月三日午前十一時十五分！遂に、チエジレン首相は、我方の申入れに對し、「ドイツ政府から何らの回答に接しない以上、戦争宣言するよりほかなし」と痰阿を切つてしまつた。他方、フランスが虎の威をかる狐のやうに、イギリスの後から、對獨宣言をやつたのは、その最後通牒の期限の到来した三日の午後五時であつた。

定めがたきは、女心と秋の空だ。あの國際會議案を鼻かまれてしまつた伊首相が、ムツツリばかりしてゐて、一向に腰を浮さうともしないばかりか、五日には伊は中立態度を決め込んでしまつた。

しかし、他方、「一戰戰果擴大を期し、けふ波蘭へ總攻撃」との獨軍の進撃が傳へられたのは、同じこの五日である。それに引きかへて、西部戦線では、「九月五日現在までに、いまだ一發の彈丸も發射されてゐない」といふのが獨軍當局の公表である。そして、獨軍

# 北支蒙疆派遣隊に参加して

教授 中村良之助

報の爲めに響くからにはそして與重青年勤勞報國隊についての話といふ上からは今少しでも實のある話と思つたが、何分にも、約二ヶ月全く命令のまゝに「行動」に専念した爲め、吾れよりも、終世に再び得難い幾多の體驗を短時日に豐富にした譯で全く報告なり所感なりが多きに過ぎるのでまづ此の所へは行旅の二三の挿話のみを記する次第である。

長い隊名——現地の兵隊もはじめは仲々に覚え切れなんだと云はれてたが——此隊名を讀めば大方の想像もつくであらうし、行く先きが北支とあれば未だ戦塵の残る土地との見當もつく譯、従つて夫れ等に關する事所謂眞面目なる報告は時に記して都合の悪い氣兼ねある事は諒解されやう。といつて所感も甚だ個人的になり自然批評がましくもなる次第故、此處は仲々に筆とる事が至難で全くイヤにもなる。

しかも他面、現地に得た感激は強烈で、此感銘がともかくかうして書き出すと新たによみがへつて右に左に文意をさまたげる。さうして正當中庸なる所へはおちつかしめない。だがとにかく書く事として出来上つたものが次の通り。

## 一、無意か無事か

内原訓練所が滿蒙开拓青少年の集る所である事は誰も知る所だが、尙私等が此處に入るといふ意味はどんなものなのか。しかも學生の來集に一週間先立つての

入所。勿論常識として凡そ支那も大陸なら平素となれぬ身を、なれぬ生活をやるが故に此處で支那向きか大陸向きにする位は誰も想像されやうが。此處の生活回顧の一片。

板一枚、しかも鐵板一枚頭の上で「二三四……」チヨロツと足どり確かに體操がはじまつてゐる。此處は特殊船〇〇丸の船艙内

『チヨロツと、君ゾー迄内原そつくりだね。僕はあすこの生活を考へるとゾーとするよ。何をどうしたやらいまだにわからん』

『考へるなよ。實行だよ。ともかくこれで約二十日すんだからの、全く無事にか無爲にか』

『それでいゝんだよ。文部省は唯場所だけ借りたていつてたらう。その上に人手が無く多忙だつたといつたが全くの所全國の大學専門學校の先生多數が今日明日、否今からの豫定がつかなくなつたから奇妙だ全く集めたんだね。運慶を以てか』

『それにしても借りられたか借したか、あの訓練所と所員には全く迷惑だつたらうよ。あのヒタムキな心の人々に對して濟まん氣がする。さう思ふと益々我々が集められたわけ何をしに行つたかわからなくなる。あの支那通の兵隊さんの講話と訓練所生徒の滿洲行きの壯行會の印象だけだ。いたいけな子供と云へぬかもしれぬが少年が行手滿洲の野を早くもの

は、ワルソー、ワルソーへとひた走りに迫る一方である。

しかるに、佛へ大移動された英兵は、シキリばかり入れてチツトも立ち上つて四つに組まうともしない。ハテ？「戦備不安か術策か」英佛、戦はざる戦宣言告ナント大毎が掲げた七日には、獨軍機械化部隊は、もうワルソーのわづか十五里手前まで猛進してゐたそこでフランスでは、キマリワルソーに「佛波援助條約再確認」はしてくれしたが、「さながら、ピクニツク」ナシテいふ見出しで、同じラインでも獨佛兵が水泳競争をしてゐたのでは、波蘭でもポーと頭がワルソーになるではないか！

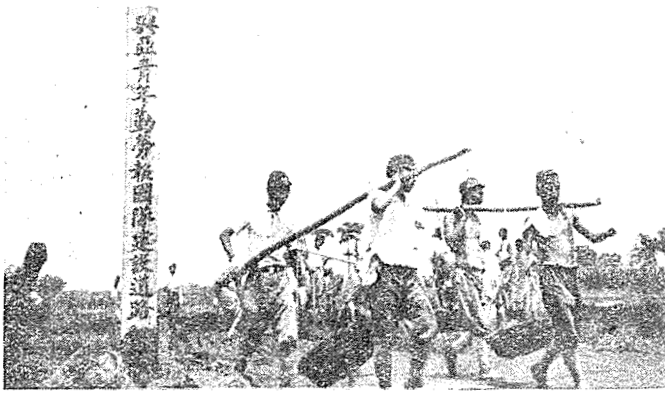
「戦はれざる動亂」、人これを何と讀む？

「醜い争は、いつも弱い美しいものを繞つて行はれ、その料理によつて和げられた」と、さる哀史氏はいつてゐる。呼々、波國のポーランド、今度生れて來たら二度とふたゝび他力は頼ふまいぞよ、嗚呼！

ポーランド料理で誰が破コクのご馳走に舌鼓を打たうとも、終まで他人の食べてゐるのに見とれてゐるべき時でない。一貫した國是の下、國民自主。白人の破境を救ふの橋あつてこそ、大和武夫の道ではないか。しかし、ものには本末がある。近きより遠きへ。東亞荊棘の道を拓かんとする日本。良ならば、正ならば、千萬人といへども我獨り往かん。



西郊に於ける労働奉仕作業



んで蕭々と勇むあの足とりだけは別だね」  
『まだある。僕等のサーベルの使ひ方と。 撃手の  
禮。誰かゞまた「用便外出」と云ふ事が残つてると叫  
んで動物園の猿然とトタンに甲板に飛び上つてゐつた  
後は一齊に洪笑。

二、プランと泥

「起床」「起床」

どなられてさめた眼にぼんやりと電燈の影がうつる  
午前三時だ。然し學生は水筒への湯の補給に立つた

のが午前一時、歩哨に立つた者は不眠。これ戦地の一朝  
何を喰つたやら顔を洗つたやら殆んど夢中で出發の  
準備をおへて營庭に整揃ひをする。

暗の中に人がうごめいて一、二、三、といふ番號を  
呼ぶのがきこえるのみ。狭い所へ多數の學生が隊伍を  
とよのへつゝある譯うつかりしたら他の部隊にまぢが  
へて指導教官殿は自分の部隊からオイテキボリを喰ふ  
かもしれないのだ。何分にも研究室や圖書館と違ふ眞黒  
暗の中。どちらむいても同じやうな格構をして銃と劍  
もつ頼もしい護國の兵たる學生諸子。前進命令があつ  
てギをら兵舎を出でんと衛兵所をようやく通り一步門  
外に出るや最後デヤブン……ズルズル……

これは雨後の支那路への最初の洗禮なのだ。

これで泥靴、泥ゲードル、泥ツボンになつてスター  
トはよし次は……尻餅ちのみ。然し流石は指導教官殿  
だ。サーベルだけはちやんと片手に、そして嚴然と曰く  
『日本刀だつたらこれでいゝのだがの——腰劍とい  
ふ奴余く……』

誰かゞ又曰く

『サーベル腰につゝた兵隊さんは……といふ童謡は  
ありや今日の時代には確かに錯誤だね。これでいざ  
鎌倉の際は……情ねえわい此犬おひじやね』

又暗に聲あり

文部省も罪じやの……

『だからわしや日本刀を仕入れて来たよ。  
腰辨と腰劍、此奴はなるだけ首に迄違ひ方がいゝの  
と近い方がいゝものと同じや——。雨合羽不用だの、  
何だの余くペーパープランか。内原もそうだったか  
最近文部省の犬見えん様じやが。わしや北京の街

では見ても此原ッパじや見えんのじや』

『泥道に泥水、泥姿これで泥仕合でもはじめたら正  
にドロドロ……ヒュードロドロ……か』

『さーこれでプランもどうじや、但し道が』  
何時か一隊は萬壽山の壁をはれて垣々たる所に出て  
ゐる。

三、隊員學生よ忘るな出陣の朝を、

あの嚴肅と壯大の氣を學内に傳  
へてくれ。

豫定表によれば、今日は戰備行軍。廿餘キロの道に  
は尺餘の泥濘と腰をも没する泥川が我々をまつてゐや  
う。不幸にも夜來の雨雲が低く小雨すら降り出した。  
だが此處は第一線。行手には匪賊も居やうし、敗殘兵が  
待つてゐやうものを。我々を目的地迄誘導護衛さるゝ  
現地の兵隊さんの御苦勞は云はずもがなはるばる此乘  
出した隊員の肩宇には相當の決意が惚はれて壯圖の朝  
は折から厩舎からの馬の嘶きと佩劍の音。エンデンの  
音。準備にあはたしい兵と隊員を含めての出陣譚だ  
出發命令をまつ様子。何時か數十頭の馬が門前に並  
んで人待ち顔。

やがて川崎隊長殿、つゞいて田代中尉殿があらはれ  
て一同集合。

『本日の行軍の指揮は本官がとる。戰備行軍の爲學  
生隊の編成は○○○に変更する。』

昨日の戰場談話會で學生の血肉をおどらした田代中  
尉殿の一聲、に學生は蕭々と下命の隊形をつくる。中  
尉殿はと見れば莞爾として川崎隊長と顔見合して更に  
『第一小隊長○○少殿は尖兵として、行路○○を警  
戒しつゝ……』

『第二小隊長〇〇少尉、第三小隊長〇〇は……』  
學内の教練と異なり語らずして一切は命を賭しての  
戦備。やがて出發の命令、先づ

馬數十騎が行く、トラックが行く、機關銃が、抛彈  
筒がそして歩兵突兵が指導教官の騎馬隊も加つて各々  
伍間、隊間隔がとられて實に堂々の出陣。

古くは繪草紙に見た日露役、近くはニュースに見る  
行軍の畫卷が、今こそ、まさしく、此眼の前に展げら  
れ身は其の内に在るのである。教壇から眺めた學生、  
其學生は今日は立派な護國の兵と化して身につけた重  
々しい裝備も何のその、實に欣然と隊間の連絡に當つ  
て前に後に忠實に命令を傳達してゐるではないか。

はるか行手の起伏する丘陵、それ迄にのびひろがる  
大豆、粟、高粱の畑。満目蒼緑たる大陸だ。

天地蕭冷の秋雨にぬれて、平和なる收穫の來訪を告  
げるが如くだ。

知らず今日の一日、行旅の前途や如何に。

#### 四、武人の情心に隊員は泣く。

言は聞、だがその故に又聞く者をして萬斛の情感を  
湧然たらしむる、洵に、尾高部隊に配屬（現地到着）  
されたる我等第二方面隊員一同が、忘れ得ざる感銘に  
打たれた話がある。

一夜を兵舎にあかして、意氣も高らかに、倍新しき  
地で何事を興へられ、如何なる下命があるやと學生隊  
員は緊張の内に尾高部隊長閣下の訓示をまつ。此緊張  
と期待たるや現地に更に第一線へ前進したるが故に加  
はる未知への興味と一縷の不安を拂拭せんとの興奮と  
努力の交錯する形容を絶したる感懐である。

軍司令官に對する申告も型通り終つた。閣下は破顔

の内に

『私は諸君が來られる事を聞き早くも其情景の如何  
なるものやと楽しみ今日を待つたのであります』

言は暫し途切れた。其温容は一段とやはらぐかの如  
く閣下の脊後の壁や四圍の窓ワクの破れたる様か、何  
事かを囁くが如くに在る時に。

再び訓示はつゞけられる。

『貧しき家にあつて、子をまつ母、故郷をはなれて  
久し時に、漸やくに其子が郷關に急ぎつゝあるとの  
報は、其母に如何なる感懐をいだかしまやうか、子  
をまつうれしさは勿論だが親の身として何にもまし  
て、家屑の貧しさが氣に懸るのではなからうか。萬  
事に不便な此戦地に君等が來る——夏の休みに來る  
といふ——それをまつ私は果して何を、如何にすべ  
きかを當然考へさゝれた次第であります。が  
何を云ふにも此戦地、諸君を待つ。先き申した心地  
に比べて此第一線では……』

此頃から此方彼方に涙をすゝり聲を忍ぶ様ようやく  
あらはとなる。

『夏休みをはかつて君等が第一線に來られる——時  
變下に學生にとつての休暇の意味が變るべきは勿論  
だが、内地にある君等の同輩が如何にあらうとも、  
ともかく、炎熱下の大陸に自ら進んで認識と體驗を  
得やうとの決意、自ら身を捧げつゝあるの状は——  
これは仲々の事で邦家の前途について慶祝すべきは  
勿論だが、諸子をつかはさるゝ身内、やがて廣く銃  
後の諸子の心をはかつて我々一線將士は感懐をあら  
たにしつゝあるのであります……』

一堂に集まる隊員我々。故國をわかれて、しばしと

は云へ身も心も一切は現地に下命や如何にとまぢつ  
ゝある矢先に當つてはからずも此言を賜はらうとは。

されば其後に我等が經たる全行旅は此偉大なる武人  
の情の導きに終始した譯。又前線にあふ將士からの一  
切の感銘と意氣も洵此將軍の部下たるにふざわしき實  
に貴き大和武士の姿であつた。

#### 五、體驗を語る隊員は全體員直立不

動を體驗す。

げに、わかれの惜しまるゝ日は來たのである。第一  
線兵團配屬訓練も無事終へて再び我方面隊は基地に戻  
り閣下に申告するの日は到來したのである。

勤勞報國と云ひ、興亞を唱へつゝすごせる此數句。  
隊員は此の聖業に何程の事をか捧げ、大陸から何者を  
把握せるやは此期に俄に決し去れる問題で無い事は當  
然だが、倍近く袂かれるに際して、閣下の下果して何  
を告げ何を謝すべきや。眞實の所、我々隊員一同は閣  
下をはじめ前線將士に「ごやつかい」になつた次第で  
あれば、唯其感銘、其恩義に謝する以外、顧みて何者  
も持ち得ないのでは無からうか。宜なる哉方面隊長の  
型通り申告の後に展開せる懇談會には、隊員の所感申  
告が一樣に一線將士の勞苦と意氣への感懐をたゞへる  
ものであつた事は讀者、校友諸子にも日日にニュース  
を通じていだかれ得るものと同じではあるが此處に大  
方の想定を超えて、これこそ四句の大陸苦験の甲斐で  
もあれば果又大陸將兵にわかるゝの淋しさをうつつたふ  
る隊員の眞情と推さるゝ一挿話の擡頭を次に記さう。  
隊員の所感を興深げに聞かれつゝあつたがやをらた  
ゝれた尾高閣下

「私は今日迄一線將兵に對する數々の感誦や慰問に接しました。唯今學生諸子の話に上等兵殿といふ敬語を用ひられるのを聞きましたが、これを聞いて私は感慨無量です。軍隊生活や戰場に馴ない且不规则な此戦地の生活體驗にも拘はらず得られた所は正しく學生の身をはなれて一分隊長に殿でふ敬語を用ひらるゝに至つた後敏さこそは一に學生としての教養を語るものでもあれば又はるゝ、現地に送られた數日の體驗の然らしむる所、教へず語らず強ひず自ら悟るこれこそ體驗の貴さであると思ひます。禮義としての殿で無くまさしく兵の行爲と心情に共感され一線の勞苦を悟得された時に此語がかくも自然に發せられるので全く貴く聞かれたのであります。これこそ此日頃私が諸子に期待した所でもあれば又諸子を第一線に送る憂苦も全くこゝに晴れる心地が至します。」

しばし閣下は暗黙されて、又

「此よるこひは部下一同もわかつて永く今日の紀念と致し度く……」

私は下手な記述は止めて、これ以上は諸者の想察に委す事の方が適當と思ふ。それにしても

「心なき美辭、麗句を並べてアイサツに代へますと云ふ事が凡そ如何なるものか、又肺腑をつくは其言句に非らずして誠は「心」であつて學生隊員は一再ならず閣下の恩情に感泣した次第。されば教へず強ひざるに「直立不動」の姿正が閣下の靴音が消えて後も永くつゞけられ、一同は今日迄の行蹟を自省するかの如く、沈黙の内に眼のうるものもおぼえざるが如くであつた事は報せなければならぬであらう。」

## 六、校友は待つ

珍しいまゝに車からプラットホームへおり立つ。學生隊員の一組は呼ばれて夕食の配給に急ぐ。他の一隊は兩肩に數個の水筒をつりさけて給湯所へ急ぐ。豊臺の驛は此等の俄の兵隊さんで充満し驛員はこれを迎へるのに喜々としてゐる様である。

はじめて暮れる大陸の空、雨雲の間からの斜陽に浮く給水筒や汽笛。思はずも征旅の心をしづめしめる折柄我分隊の數名が一人の驛員をとりかこんでしきりに話込んでゐるのに遭ふ。「先生先生、中村先生」

との叫びにふりかへると顔なじみはあるが先方は變つた驛員の姿で當方も團服にサーベル。最近東部卒業の一人巽政治郎君だ。異郷の慣れぬ旅に意外の邂逅を喜んだ。同君に贈られたパンと煙草、それが出水で食事の配給がたゞれた翌朝の唯一の食料となり多數指導官の腹を満さうとは。

三十分の停車時刻も過ぎて、つきぬ驛頭の訣れに「先生、學校をたのみます。貧弱乍ら校友として此地に活躍致します。開拓の餘地は多いんですからどしどし新しき校友を送つて下さい。」と。

誰も知人も無からうと思ふ此工場に、私を名指しての面會人ありとは。——いぶかり乍ら行つて見れば、小澤祐二君(昭三)だつた。此春東京驛頭での邂逅と云ひ此度と云ひ、珍しい。これも全く卒業生——校友といふ親しさ故だ。同君は今濟南驛の勤務で昨日も袁州迄運轉して行つた話。早速學生隊員と沿線の整備の話に花がさく。これも前戦に活躍する校友の一人。今しも歸つて一汗ふかうと褲一つの所へ「面會人」の通知、恐縮しつゝ衣服を着ける間も無く

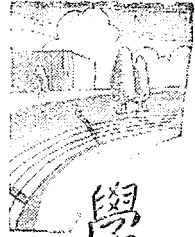
「先生お元氣で何より、今迄大學から一人も先生は來られた事はありませんのでなつかしく片身がひろいです」と入つて來たのは、小林正義君(昭十大法卒)。學生時代からの特有の人なつかしい微笑をたゞえてゐる。今回の事は新聞で知りどこの先生が來るかと思つてゐたとの事。校友ならこそその感が深く同君が在學當時の事を語り合ふ。其後の文學部の話學園の現状等等欠つぎ早の質問に學生は各手に答へるも仲々に同君は満足しさうも無い。事程に此未だ異域であればある程、母校の面影がしのばれる様子

「先生此處じや一寸話もかたくなつて。出られませんか。先生。それに御相談もあるし」

愈々渡瀆たる所を見せる。同君は今少壯の身で齊魯電業股份有限公司庶務係長の重職にある。卒業して數年此地位に固まれば次に來る問題は當然家庭である。

此事が今後の我大陸發展に至大の關係あるを知るや知らずや、同君の御相談は諒解した事にして話題は新卒業生や校友、校友會の活動に移る。西苑兵舎に著い最中を訪ねて來られた川越茂樹氏(昭一〇專二法)も皆一様に母校教授の觀察派遣と校友會の不備と校友と母校間の連絡と其善處を希望される。時に激情を露はして學生隊員に日本の躍進と母校の運命を教へ語らる。一線に身を以て活躍する烈々の氣魄は又母校の活動に就いて當然に數段の躍進を願ふに至らしめるのであらうか。お互に經驗する事であらうが

「國を去つて國を知り、母校を去つて母校を知る。天晴勤勞報國に身を捧げんとした決意を固めて大陸に渡れる學生、未だ眞に國を去り母校を去つた譯では無からうが此等適逢せる校友が一樣に物語るものの内から何者かを感得するであらう。一つは母國人の母國への愛もう一つは校友の母校愛を



# 學内報

## 第二學期始業

第二學期授業は大學各學部は九月十五日、大學豫科及專門部第一部第二部は九月十一日よりそれぞれ開始した。

### 青少年學徒に賜はりたる

#### 勅語拜戴

本年五月御親臨式當日青少年學徒に賜はりたる勅語の謄本傳達は八月二十三日午前九時より大阪府正廳に於て舉行され、學長代理として中谷法文學部長拜戴歸學した。而して拜戴式は學部は九月十八日午前九時より威徳館に於て、豫科は同十一日午前八時より豫科講堂に於て、專門部第一部は同十四日午前八時半、第二部は同日午後六時より天六學舎講堂に於て夫れ夫れ舉行された。

#### 語學講習會を終了

第十七回夏期語學講習會は七月十四日開催し、八月五日終了した。終了當日午後六時より講堂に於て修了式を舉行、神戸學長より修了證書の授與並に訓辭ありて七時閉會した。

今期の會員數は英語科六四九名、支那語科九九九名、

合計七四八名であつた。

尙英語科は八月八日修了試験を施行し、合格者には八月十四日合格證書を授與した。

#### 集團勤勞作業實施

本誌前々號(六月)既報學部、豫科、專門部學生生徒の大阪護國神社の勤勞奉仕に引きつゞき、學長始め全學を擧げての集團勤勞作業は、忠靈塔建設、校庭・校舍・道路の補修・清掃、大阪府町公園大擴張土工の作業を左記の通り從事した。

學部は九月十一日より十三日まで

豫科は七月十一日より十五日及び九月八、九日

專門部は七月八日より十二日まで

#### 興亞青年勤勞報國隊歸學

七月末より一ヶ月餘北支、滿洲に於て炎熱下の勤勞作業に尊き汗を流し、興亞新建設の認識を把握した。本學參加隊員は天津方面の法文學部(指導教育中野學生主事補)學生十名は八月二十六日、濟南方面の經商學部(指導教育中村教授)學生十名は同二十九日、牡丹江方面の豫科(指導教育河村信教授)及び佳木斯方面の專門部一部(指導教育河村宣教授)各五名は同三十日神戸着歸學した。而して歸學復命式は學部及豫科は九月九日午前八時三十分千里山グラウンドに於て、專門部は同十四日午前八時三十分より天六學舎に於て舉行し、ついで報告會を開催した。

#### 學部教練用銃器拂下

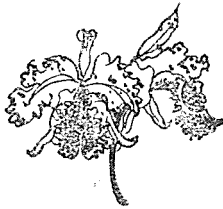
本年度より學部教練は必修科目となりたるにより、今般陸軍省より文部省を通じ教練用として銃器三二九挺の無償拂下げを受けた。

▽高橋教授 内蒙に於ける土俗、民謡、民謡研究の爲め張北、多倫等を約二ヶ月調査し、九月十二日歸學した。

#### 軍務公用者氏名 (其の十四)

- 卒業生
- 林 安 弘(昭七 大法) 北村 文之助(昭八 大法)
  - 平井 孝 道(昭八 大哲) 中川 源八郎(昭十 大經)
  - 伊藤 正 記(昭十三 專二法)
  - 堀本 正 雄(大法 二年) 春 名 玉 治(大法 一年)
  - 長田 幸 道(大法 一年) 野 口 賜 也(大經 一年)
  - 上田 三 郎(專二 經一)
- 在學 生

高級國書專門



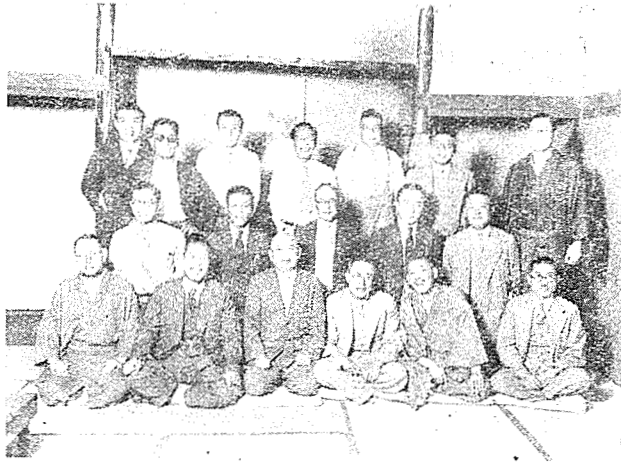
二十段家書房

大坂市波島御前通第壹入  
電話四七三三

# 校 友

## 大 連 支 部

七月二十三日は烈々たる快晴、酷暑に喘ぐ座部の人達は海濱を慕つてドット押出す。列車は幾車連結しても足りない有様。混みに混む列車にぶらさがりながら夏家河子に着くと辨當を握げたりビールを重さうに擔いだりした校友がちらりほらりと人混みの中に見える。



大 連 支 部 の 集 り

る。追ついたり、追つかれたりして期せずして一隊となり木橋を渡り別荘地帯を通り抜け。山麓の木村氏別荘に着くと十二時を過ぎてゐる。目標の旗を軒高く揚げて一同打寛びで海波千里の上を滑り来る涼風を全身に浴びて爽快心よくも來たるかなを感じる。海に飛び込みオリンピックに出場しそうな鼻息で泳ぐこと幾十分？木村さんが沸してくれた海濱山麓の湯に浸り、實に伸びびりした心地を恣にして一同長草を圍み家族も交じて持參の自家辨當を開きお互に啄き合ふその美味さ、兼行法師でも居たら實にうまいことを云ふであらう。和氣瀧々の清らかな海濱情緒はいつまでも續く、數時間も一瞬の如く感ぜられる。下手な碁に熱中してゐる男、弱いくせに強さうな願して懸授してゐる男、涼しさに夢の世界を彷彿してゐる男、刀剣から生れる様な話をしてゐる男等々、千姿萬態、莞爾たる海濱の別荘風景を描き出してゐる。

かくして本第三十九回例会は木村氏の御厚意で心置きなく悠々閑々海邊に楽しい一日を送つた。尙當日の來會者は次の諸氏である。

## 東 京 支 部

學月十七日午後五時半より麹町區丸ノ内中央亭に於

- 木村 俊八 秀島 金治 高木憲一郎 西本 野見
- 萩原 博 同家旗二人 藤井 保 辻 菊雄
- 武笠 肇雄 安達 竹七 貴村 一雄 平井 三周
- 同家旗一人

て、東京支部總會並に懇親會を開催す。

武田博士の母校現況報告を、一入ほど懐かしく聞きつゝ、食事を終り、別席で同博士、大月氏、大村氏、板橋氏等の有益なる時局談に花を咲かせ、新會員の星安渡邊氏等なり青年として抱持してゐる熱烈なる時局觀に、老人達を意を強うして若返らせる所があつた。斯くて和氣瀧々裡に午後九時半散會した。

當日の出席者は次の通り

- 山口直三郎 大月義平二 米田 忠八 深谷 茂
- 北出 美術 朝倉 健二 森田彦四郎 徳田 高二
- 堀江 貞吾 橋井 吉造 中村 啓藏 三蒸 武雅
- 加邊 力 高見 行雄 永田宗太郎 渡邊 源
- 清原五六郎 武田 宣英 平井 正義 大村 喜規
- 貴志 房廣 板橋 菊松 福田 繁芳 星安藤四郎
- 井上松治郎 前田 楳次 津尼 正義 山田義之助
- 北本富三郎 古川 武 藤田 實雅

## 新 京 支 部

七月二十七日午後七時よりダイヤ街扇芳グリルに於て第二回例会を開催する。

話題は今回は新京支部の古くからの中心校友の出席を得たので例会としての第一回より今回迄の経過及び機關誌「國都」發刊を中心に校友相互の忌憚の無意見を交換する。話せば分る、打ては響くで校友會新京支部發展の願望は期せずして一致、校友會滿洲本部の創設やら校友會館の設置やら、なか／＼頼もしい會話が跳出し最早や滿洲本部も熱成した様な勢ひではしばし時間の過ぎるも忘れ結局話ばかりに終らぬ様此後會員の一層の努力を必要とする事に結び、九時半實に和氣瀧々裡に閉會。當日の出席者は

- 喜多 大北 古川 光井 根本 河本

——在校生歡迎會——

滿洲帝國體育聯盟主催の全日本學生拳闘新大會に出場の拳闘部選手及専門部講演部滿洲遊説隊並に至誠會員歡迎會に校友の熱意に依り在校生の連絡の團體不出席にも關らば八月五、六兩日に亘りダイオ街扇房會館に於て開催するを得た。校友會支部は如何なる歡迎の盛會を計畫してある哉も知れず。

八月五日の歡迎會は午後六時より繰定通り至誠會の高橋、寺部、上野三管を圍み開催。八月六日の歡迎會は正午より幸ひ學生全部、大連からの平井さん及び電話通信で集合するを得た校友とで開催。講演部代表高山龍治君先づ連絡の團體を説び大陸視察感想談を以て立ち上れば以下六名の部員諸君自己紹介と青年學生の大體發展論を以て答へ、拳闘部選手、至誠會員の順に熱辯を振へば大連より校友會支部秀麗會の現況及び卒業生にして渡滿支する者の常に心に銘す可き諸點に付いて平井さんの後進者への注意事項あり、滿洲なれば支那なれば餘計に内地以上に人材を必要とする事、腦を圍めて大陸に來てもらい度いと結び、新京支部よりは廣瀬さん代表して學生を迎へて我々の啓蒙される點を感謝し、學生のもつ意氣と熱意を錐の先尖に譬喩し錐の穂先は包む可くも折る可きでない和醜味を噴ませ最後に青木さんに感想談を御願ひした後は、各自の質問交換とし、談論風發、開催の正午から閉會の四時迄新來の學生諸君には一寸固た過ぎたと思われ程の滿洲智識の大體詰込みも校友なれば實に和氣霽々裡に進行する事が出来、午後四時過ぎ散會。散會後講演部學生諸君は廣瀬さん青木さんの御厚意で自動車を驅り新

京市街見學。夜は大同公園の拳闘大會に大學生徒に押かける。

當日の出席者(五、六日共)

- |      |        |       |
|------|--------|-------|
| 拳闘部  | 齋田 信男  | 田田 孝次 |
| 講演部  | 中村 定二  | 朴 貞 彌 |
|      | 高山 龍治  | 植杉 尚文 |
| 至誠會  | 高橋 良則  | 寺部 清繁 |
| 大連支部 | 平井 三男  | 上野 義一 |
| 校友   | 廣瀬 義雄  | 喜多 初次 |
|      | 三宅 真孝  | 志岐 五六 |
|      | 根本 大五郎 | 大河内 豊 |
|      | 田中 木太  | 河本 義教 |
|      |        | 佐藤 丈夫 |
|      |        | 青木 太郎 |
|      |        | 宗内 士郎 |
|      |        | 光井 常雄 |
|      |        | 伊藤 記夫 |
|      |        | 李 炳 文 |
|      |        | 上野 義一 |

『宣撫班』 『興亞會』

今春四月内地全國より選拔されたる杉山部隊本部宣撫班製員の内に我が關大の學友十數名は一夕相集ひ、母校を紐帶として此の大陸で十年の如く、同志として、戦友として相親み、協力してゐる。選ばれたる我等は高潔なる人格と確固たる信念及び熱誠ある實踐力とを以て銃なき戰士として東亞新秩序建設に邁進すべく覺悟を新たにせり。



宣撫班の女校員

さて宣撫班とは板垣陸相の言葉を借りれば、一、仕事の内容は土地の状況、時期の如何にもよるが避難民の職業、住居地への復歸勸告帝國の眞意徹底のための宣傳、治安維持會の設立、鐵道掩護部隊の設置、歸順の勸告、新幣制に對する理解、合作社を通じての金融、農民の種物分配市場の開設、農産物の種物方法配達、學校の開設、細民に對する施米施藥等多數に亘つてゐる

一、多くは交通不便の場所で危険を冒し艱難に耐へ日夜活動してゐる、これが爲め犠牲者も少くないが何れも次第に仕事に慣れて治安維持に貢獻してゐることは感謝に耐へない。

要するに我等の使命は日本と支那とを確く結びつけることだ。一億民の眞意を傳達することだ。我等同志一同は昭和聖業の完成を期するため、我等の血を減じ骨をけづつて戦ふことは寧ろ男子の本懐と信じてゐる左に學友同志の氏名を示せば

- 張 耕三郎(昭十三專法) 高津壯太郎(昭七 專文)
- 木村 喜英(昭七 大商) 中江 巽(昭八 大法)
- 横河左武郎(昭九專一商) 向井 克己(昭九專二法)
- 伊藤 勘一(昭十專二法) 相浦芳次郎(昭十一專二法)
- 佐野 公敏(昭十二專二法) 大野 成考(昭十三大政)
- 宮脇 英夫(昭十三專二法) 寺尾 成之(昭十四大經)
- 賀須井 直 榑原 重喜 上田 龜藏
- 伊藤 英夫 轟 武夫

五綠會夏季例會

昭和五年大學部卒業生の同窓會は毎々向上の一路をたどり會員相互の互助機關として發展しつゝあるが夏

手例會は去る八月一日夜、大鏡百貨店六階別室食堂で開演した、暑さの爲出席者少かつたが色々同窓生のユニースが聞かれて楽しい一夜だった。尚昭和五年度卒業生は主客者遠せいな、御消息を賜り度し、當日出席者左の如し

樹原 武雄 岩田清太郎 藤 謙二 寺下 勇  
島久 四郎 白井 敬史 藤田 定治 鈴木 武夫  
(主宰者鈴木武夫)

### 會員消息

淺沼 常助君(昭三)專法) 大分地方裁判所長より鹿兒

島地方裁判所長に轉任

福光 勇君(昭四)專法) 昭和十四年八月二十日死亡

田畑 留七君(大正) 富山縣より福島縣石城郡錦

村吳羽紡績社宅へ轉居

山本 勝市君(昭一) 國民文化研究所員、東京市

麻布區狸穴町三一に轉居

山田 壽男君(大正) 日本海上、名古屋支店より

京城支店へ轉居

井上 軒君(昭四)專法) 辯護士、井上鐵工所取締役

に就任

畑 義博君(昭二)專法) 東京市豊島區千早町三ノ二

七に轉勤

藤田 肇君(昭二)專法) 府特高課より船場署へ

田中 茂君(昭二)專法) 野村銀行蔵ノ茶屋支店より

京都大宮支店へ轉勤、住所は京都市上京區紫野上

柳町一〇

野崎 正雄君(昭三)大法) 今福署より川口署へ轉任

福原政二郎君(昭三)專法) 北海道廳事務官より兵庫縣

地方事務官に轉任

杉本 信雄君(昭三)專法) 兵庫縣廳商工課より厚生省

衛生局保健課に轉勤、住所は東京市神田區三崎町

二ノ三六、雄鳳館

大和屋 嚴君(昭四)專法) 滿洲房産會社記給課に勤務

通信先は新京市祝町、興業銀行支店內河西正彦氏

氣付

谷 源治君(昭五)專法) 築港署より市岡署へ轉任

木田 茂百衛門君(昭五)專法) 愛媛縣廳より大阪府經濟部

商工總務課金融係に轉任、住所は市内旭區野江町

二〇一

松井 喜太郎君(昭五)專法) 三菱銀行船場支店より三宮

支店、神戸市神戸區海邊通八一に轉勤

川西 武治君(昭六)大法) 今宮署より尼崎署へ

安田 倫藏君(昭六)專法) 郷土部隊へ應召入隊幹部候

補生として軍務に精勵してゐたが病の爲歸郷を命

ぜられ目下郷里富山縣魚津町下新町に於て療養中

森山 輝君(昭六)專法) 九條署より府警察部交通課

に轉任

石田 芳春君(昭六)專法) 住吉區帝塚山東一ノ二三に

轉居

藤野 春三君(昭七)大法) 島之内署より八尾署へ

笹原 圭三君(昭七)專法) 鹿兒島縣豊田郡中野村に現

住

菊池 一男君(昭七)專法) 天満署より府警察練習所へ

轉任

鶴原 幸雄君(昭七)專法) 姫路歩兵第三十九聯隊に入

隊後勇躍戦線に立つて活躍してゐたが、小隊長と

なつて保寧西北滿城北方約二十軒大王庄警備隊の敵の遊襲に遭ひ奮戦遂に名譽の戦死を遂げた。遺族の住所は住吉區天王寺町三二七六

卜田 章之助君(昭七)專法) 大阪府港區西田中町五ノ三

三に轉居

田中 清司君(昭八)大法) 府警察部特別隊より玉造署

に轉任

辻 玄光君(昭八)大法) 神戸税關警務課より事務官

補として總務部轉出課に轉任

鈴木 克巳君(昭八)大商) 兵庫縣武庫郡瓦木村高木東

大前三五三に移轉

中川 政人君(昭八)大商) 尼崎市神田中通八ノ二六九

森村 貞茂方に轉居

鈴木 定巳君(昭八)大商) 住吉署より玉造署へ轉任

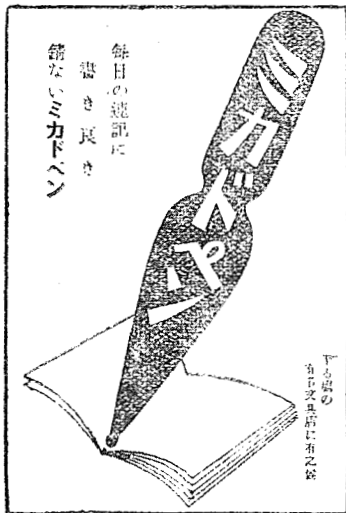
中村 貞次郎君(昭十六)大法) 警部補に任じ府警務課より

九條署へ

内田 武巳君(昭八)大法) 九州水力電氣會社を辭し、

西成區津守町五八三、共立電機製作所に技師とし

て入所



毎日の速記に  
書き長き  
錆ないミカドペン

下の如く  
有る文具は有るが

大和 英雄君(昭八專二法) 帝國製茶會社經理課に勤務

村田 英一君(昭八專一商) 上海西華德路七號に移轉

外村 治義君(昭九大法) 金融組合を辭し朝鮮マダネ

ノ七 カイト開發會社に入社、住所は京城新堂町四一五

安本 吉住君(昭九大法) 昭和十三年九月十六日死亡

片岡 宏君(昭九大法) 警部補に任じ今宮署より黒

山署へ轉任

井上 萬藏君(昭九大法) 加藤物産會社京城出張所よ

り張家口出張所(張家口南武城街一二)に轉勤

黒田 邦彦君(昭九專一商) 豊中市南櫻塚九二四ノ一に

轉居

樽 庄一君(昭九專二法) 大阪府警部補を辭し、蒙疆

地區察南自治政府蔚縣々公署警務指導官として赴

任「當縣は張家口より西南〇〇里、比較的治安良

好しかしたまには共匪の盜動もあり油斷ならず、

討伐も時々政行と」來信

廣瀬 實君(昭九專一商) 住吉區北田邊町三一七、小

池方に移轉

西垣桂太郎君(昭十大法) 株式會社大島製作所に轉勤

住所は東京市大森區馬込町四ノ一七五

江崎 光二君(昭十大法) 警部補に任じ入尾署より新

町署へ

藤野 正一郎君(昭十專二法) エル、レイボルド商館大

阪支店勤務、神徳自動車會社監査役、住所は市外

千里山永樂園

宮川 武男君(昭十專一經) 宮本三男藏に改姓名

井手 喬夫君(昭十專一商) 滿洲國興安南省王爺廟、滿

洲生活必需品會社王爺廟支店に轉勤

岩本 正吾(昭十專一商) 滿洲電信電話會社哈爾濱電

々管理局放送課(哈爾濱南崗醫院街)に勤務

總谷 富藏君(昭十專二法) 豊中署より築港署へ轉任

木下 春俊君(昭十專二法) 熊本補充隊として訓練中の

所今度出征、中支派遣軍糧藥部隊坪島部隊阿野隊

に入隊

河野 誠哉君(昭十一大法) 三菱鑛業會社を辭し八幡市

日本アルミニウム株式會社勞務課に勤務

中村 義郎君(昭十一專一商) 歩兵曹長として外蒙國境

線に活躍中去年七月三十日遂に名譽の戦死を遂げ

た。朝鮮平安北道軍警館に令兄伊藤徹亮氏在住

岡林 續君(昭十一專二法) 警部補に任じ十三橋署よ

り津田署へ轉任

福村 敏郎君(昭十一專二經) 住吉區天王寺町三四三七

に轉居

田那 政高君(昭十二大經) 去る七月十九日死亡、遺族

は堺市錦之町東一丁四に住む

山口 靜男君(昭十二專一商) 德島縣三好郡佐馬地村佐

野に轉居

萩野 充雄君(昭十二專一英) 濟南市小緯二路一四號、福

昌公司濟南出張所に勤務、正一を充雄に改名

富永 祝夫君(昭十三專一商) 去る八月二十二日死去す

辻 義人君(昭十三專一商) 熊本清水町室岡三四四

ノ四に移轉

大先 一成君(昭十四大法) 帝國製麻會社(東京市日

本橋區室町一ノ二)に勤む、住所は東京市赤坂區

青山南町六ノ一〇一、佐々木方

長瀬 玄亮君(昭十四大法) 近衛歩兵第四聯隊附陸軍主

計中尉に任せられ陸軍經理學校學生として在學中

李 雄 烈君(昭十四大政) 府下三島郡吹田町一一四八

に於て辨理士事務に従事

齋藤 司君(昭十四大經) 近衛歩兵第三聯隊附陸軍主

計中尉に任せられ陸軍經理學校學生として目下專

門教育を受けてゐる

柏野善次郎君(昭十四專一經) 電線原料銅配給統制協會

(東京市京橋區築地)に在勤

山中木 太君(昭十四專二法) 新京にて講習を了り海拉

爾都市金融合作社(海拉爾市中央大街)に赴任、

「當地は滿ソ外蒙國境に位する特殊地帯にして、

南方にノモンハンが見えます……早くも晩秋が訪れ

ましたが、間もなく零下四五度の極寒が襲ふでせ

う……と來信あり。

小森 石藏君(昭十四專二法) 住吉區北田邊町二〇に移

轉

千足 耕造君(昭十四專二經) 神戸市灘區永手町四ノ九

### 根津菊治郎君著

## ペンからの從軍

大正十五年商科出身の同君は大阪朝日新聞社特派員として北支戦線に従軍し、將兵ともども砲煙彈雨を浴び、凡ゆる困苦缺乏に耐へつゝ報道任務を果した活ける戦場生活をペンに再現した尊き戦記文學である。東京第一書房發行、四六判三四二頁 定價金壹圓參拾錢



# 戦線だより

○部隊長元配馬將校 武藤 勇

北滿の奥地に我錦城兵團が前進して以來既に二年餘進駐當初三江省の匪賊は實に數萬を數へ居候ひしがこの二ヶ年餘間全く文字通察日なき討匪に今や殆ど匪賊は殲滅せられ僅か數百の殘存匪がやう／＼三十宛群をなし山岳深く又交通不便な邊境に余喘を保つのみと相成候然し此間將校以下二百を下らざる尊き英靈の功績は永く滿洲國建國史に傑として輝くものに御座候斯く内部に於て討匪の一方黒龍江及ウスリー江を隔て、極東ソ軍と相對し國境の守備嚴として犯さしめざる部隊の勞苦も亦一入に有之候

小生昨年未平陽鎮に於て直接ソ滿國境を警備する事約一年後表記の所へ北滿三江省勃利杏部隊氣付武藤部隊に轉じ居り討匪に従事仕り居り昨今は専ら○○を準備し光榮の日を待ち訓練に精進仕居候土用中ばに北滿の當地の朝夕は既に初秋を偲ばしむるもの有之候

先は右近況御通知迄擧げに當り本學教職員並卒業學生諸君の中今次聖戰に戦歿せられたる英靈に謹而弔意を表し候

東門部教練教官 袋井榮太郎

小生も任地到着後幸慈なく奉公罷在候間御承知被下度候到着早々から敵の攻勢に出られ相當な犠牲を拂ひ申候任地迄の行軍が數十里數日を費し炎熱と道路の悪きと軍裝が非常に重かつた關係其他露營地が

悪いので炊事其他の關係にて夜眠れなかつたので疲勞が蓄積して居る等の原因として一同非常に疲勞したのが敵に乗せられたのではないかと思ひます。其他敵の慣用手段はわからず地理は暗いし後方から給養は届かず其のすきに乘せられた感があつて敵は極めて活潑に攻勢に出て来て各所に襲撃されました。小生等の處は幸ひ襲撃はなかつたが其の變り急突又急接で恐しく悪い道をトラックに乗つてフルスピードで何里も走る。揺り落されさうな危険を侵して乗つてゐる敵近くなると降りて展開攻撃する。お蔭で軍裝でトラックの飛び乗りや飛び降りが上手になりました。

其間上司でも怒つて徹底的大殲滅戦を計畫し一ヶ月餘り戦闘と露營をつゞけて型もない程叩きつけました。其間種々な體驗をしました第一線ならば味ふことの出来ない體驗で前進中百四五十米から不意に待つて居たチェッコ式輕機二銃から猛射を受けて全く頭があがらなかつた事もありました。迫撃砲が二十米附近へ落ちた事もありました。一日の戦闘につかれて日が暮れて山中深く敵に近くならみ合つて露營する時の心持は何とも云へません。全く緊張そのまゝです小生最もよい體驗にてほんとの軍人になつた様な満足に打たれます。

昭六大法 村田定市

恰度今暑中休暇でせうが内地も異つた事でせう。此處北支もまだ暑さが去らず閉口して居ります。此處度○○地區の大討伐を元氣一杯にて完了、負傷もしなければ病氣もせず約二ヶ月間に三百數十里を

走破しました。又此度命に依り現在部隊(中支派遣尾高部隊)に派遣せられ數日前着任致しました。今後其御期待に副ふべく任務に精勵致す心算です。(下略)

昭六專法 小野利夫

始めて迎へました大陸の盛夏は連日百度突破の炎熱で御座いました。此の暑さに喘ぎ乍らもお蔭様で頗る元氣で與亞建設の業務に微力を捧げつゞけて参りました。蘆溝橋の一端に投じた一彈の波紋は今では支那全土を覆ひ盡くして何時果して何處に消ゆるやら豫測を許しません。此所一線に在る私共と銃後に居らるる皆様方と固く握りしめました此の手は必ずや帝國初志の目的を貫徹せずには置かないこととせう。(下略)

宣撫官(昭七志願) 高津莊太郎

中央軍正規師や新編第四軍その他に二百、三百と云ふ巢窟遊撃隊が散在踞居してゐる新黃河畔の某縣城所謂第一線現地に着任以來二ヶ月、六月號學報を拜受して久しぶりで故郷の土に歸る氣分にひたる事が出来ました。昨夜半來チェッコ機銃を持つ一隊が血塗つて當縣城を夜襲○○砲の應酬であへなく敗走しました。一時は城内も西、南、北の三方向から打込む機銃彈や小銃彈が十文字に交錯して唸り私も廳下自衛隊○○名を警備線に就かせるべく待機させました。結局待機のみで夜が明け敵の敗走となつて力抜けがしました。政經文化工作に日夜を明け暮れしてゐると時には日本刀を抜いてみたくなりです。どうも血の氣が多過ぎる様です。

第一線現地官撫官の職務は多岐多様ですが男として愉快極りたい仕事ばかりです。維新當時の青年志士の氣持が持てたら官撫官としての精神的方面は満ち足りなからうかと思ひます。此處には國家試験の適用がなく高等文官でも技術官でも何でも本人の氣持次第です。

昭十二軍 後 藤 達 雄

酷熱が続いて居ります。内地もさぞかし暑い事だらうと思はれます。私も皇軍の一員として最前線の砲煙霏雨の中で頑張つて居りましたが去る十四日の午前三時頃敵砲に合ひ不幸敵の迫撃砲の爲右眼上部をやられました。野戦病院に下り只今經過至極良好養生して居ります。すぐそばの戦友は即死致しました。相變らず目前の頑敵は無茶打ちをつつけて居ります。再び第一線へとは馳せて居ります。

昭十二軍 松 本 包 文

木の少い北溝では千里山のアカシヤが懐かしきれます。(下略)

昭十二軍 大 田 義 幸

又山西の奥地に参りました。當地は何しろ海拔二千米ありますので全く暑さ知らずです。そのかわり夜分とても冷え外套着ても寒いです。昨年河南省の風の酷暑を思ひ出し感愾無量です。只今討伐に警備に頑張つて居ります。

昭十二軍 木 村 昌 治

先日突然移駐下命せられ〇〇に到着仕りました、

現在地は相當賤賤の住居せし所で現在も未だ討伐されざるもの少數良民を苦しめ居るとの事ですが何れ我等の手に依り討伐せられるも間近だらうと勇んで居ります。北溝は最早や短き夏も去らんとして居り後一ヶ月又酷寒、血も凍るばかりの日が訪れる事です。(下略)

昭十二軍 宮 城 忠 行

應召以來至つて元氣にて活躍して居ります。當地へ来て學生時代ののんきさと新東亞建設の重大さを感じ、感じさせられます。

昭十二軍 富 塚 豊

受傷以來各地病院を轉々して一日も早く再び戦線に立つ日を愈願致して居りましたことも終に空しく南京に於いて最後の斷案を下され内地送還される身となり去る十六日同地を出發、十九日門前着現在の病院に收容され、洵に吾身の不甲斐なきが嘆はしく存せられます、依然として仰臥状態を續け擔架から擔架への身の轉りに少しの自由も許されず上陸第一歩も亦淋しく仰臥のまま祖國の土を踏むこともならず。(下略)

(目下東京市世田谷大子堂東京第二陸軍病院一外科ノ六入院加療中)

昭十二軍 宮 本 要

九十何度の日が續きます。大陸の暑さは又格別です。鋪道の揚柳競つて行交ふ洋車(人力車)も皆暑さにウダッてゐます。

蘭舟の姑娘の露營の唄や夫子廟

昭十二軍 波 邊 一 男  
目下〇〇方面の山間奥地に日夜殘敵の蠢動を調すべく元氣大奮闘を續け居り、据戦旗の下早や溝二ヶ年、今や大陸は蒼々として王道樂土と化すべく黎明の訪れに輝きつゝあるは誠に要賀の至りです。

昭十二軍 大 川 敏 雄

二度目の夏です。「とうとう一年も経つて来たわ」「さうもう一年になるか。短か、つたなア實際目まぐるしい一年は短く思ひました。此頃は内地を尻目に毎日雨です。城外は海の様です。にんにくもくさくない様になりました。苦力ともチヨイノ話します。

私はこの一ヶ年の野戦生活に幾多の思ひ出をもつてゐます。其の中でも、銃後の皆さんが消費統制、節約、勤務奉仕、防空演習等を敷へ切れない多忙の中に絶えず力強い御後援を御慰問に努力して下さつた事が何よりも嬉しい思ひです。

最近外蒙問題、天津其他の租界問題等新しい事件が起きて來ました。私達はどうな事が起つても東洋平和を見る迄は戦ひ抜く決心です。將來とも相變らない御後援を切にお願ひ致します。そして皆さんの御健康を戦地からお祈り致します。

銃剣をあそびてらして敵とぶか

皇陵崇敬會

今夏季休暇を利用して神代三陵・安徳天皇陵巡拜並に九州一周見學旅行を執行し、八月一日大阪發翌九日の豫定で壯圖に就いた。

一行は石田久一、尾崎林藏、濱田利雄、安藤直宏、澤田恒一に一般よりT君の参加を得て六名、参加者全部を煩して各々一日宛紀行文を擔當して貰つた。

第一日(八月一日)驟雨

午後十時大阪驛を發つと云ふので一行六名九時半近くには全部顔を描へる(下略)

第二日(八月二日)曇時々晴夕方雷雨

網戸越に吹き込む清涼の朝風を肌と感じて眠を覺ます。下關驛には八時に着く、

電車で先づ阿彌陀寺陵へ向ふ。御陵は赤間宮の西に南面して拜される。壽永四年

餘りにも御傷しい天皇崩御の御有様を追價しつゝ、皇國の安泰を祈願參拜し記帳の後赤間宮に詣でる。官幣中社に列し御祭

神は安徳天皇である。社殿の左手に平家一門の墓と傳ふるを見る。御神域を辭して西隣なる春帆樓に向ふ。此處は日清戰

役の講和談判が行はれた所として餘りに

も有名である。門司發午前十一時四十分の鹿兒島本線の列車に乗り込んで一路南下する。最初の下車驛は香椎である。官幣大社香椎宮、宮崎の宮に參拜す。宮崎の宮と云へば元寇で名高い。正面樓門にかゝけてある「敵國降伏」の扁額は當時を偲ぶに充分である。折から雨中を太宰府神社に禮拜終つて雨の止み間に神苑を歩めば樟の老樹千年の面影をのこし飛泉懸り噴水送り清爽の氣、身にせまり自から崇高を覺ゆる。社頭には今尚昔を偲ぶ昔公遺愛の飛梅がある。

第三日(八月三日)雨

大阿蘇登山(畧)

第四日(八月四日)晴時々曇夕方より降雨

今日は熊本市を後にして可愛山陵に參拜鹿兒島市に至る。(略)

御陵は山上に在り畏くも天孫天津日高彦火瓊杵尊を奉葬してある。一同陵前に整列謹みて參拜後御陵印を戴く。憶ふに尊の御鴻業今更日にすべくもなく天祖天照大神の御神勅を奉じて高千穂の峰に天降りまして天壤無窮の皇基を建て給ひ又

農樂養蠶の道を弘め給ふて國民生活の安

定を計らせられ常に正義を以て萬民を愛撫し給ふた。今此の地に鎮り在しませて拜する吾々は神代ながらの此靈氣に感へ深くした(下略)

第五日(八月五日)晴一時曇

天津日高彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊陵に着いた。鹿兒島神宮に參拜。(略)

第六日(八月六日)晴

日向高屋山上陵參拜の後宮崎へ向ふ(略)

第七日(八月七日)晴

宮崎神宮青島神社參拜後熱帯植物の繁茂する青島を見學。(略)

青島より南七里官幣大社鶴戸神宮は遠日峯の山麓幽邃の地を占め社殿は東麓の巨大な岩窟内にあつて鸕鷀草葺不合尊を祀る。社前は千丈の斷崖奇巖聳立し太平洋の怒濤激を打ち雄大言語に絶し壯觀限り

ない。玉橋の袂で一同靴を脱ぎ素足となつて具砂を踏み一大岩窟に到る。一同心から皇軍の武運長久を祈念し、しばし眼前の風光に見入る。汽車にて別府着午後九時廿九分。(略)

第八日——第九日 雨後晴

大阪に向ふ錦丸は午後二時五十分出帆、機關の音とペンキの臭になやまされて假睡む一夜、明ければ八月九日船は波靜かな瀬戸の内海を走り續けて午前十一時

豫定よりも遅れて天保山棧橋に横付となつた。九日振りに踏む大阪の土、樂しき

基督教青年會(二部)

思ひ出を胸一杯に抱いで家路を急いだ。炎熱盛夏の鍛錬を終つて清澄の新秋を迎へるに當り私達は先づ内に深き祈りの準備を努めたと思ひます。

祖國は事變と世界の動亂と政變に未曾有の非常時であり凡てに於て動員されて居ります。私共は學生基督者として社會人として信仰と愛と希望を如何なる激動期たるに平靜期たるを問はず生活の基調であり生命の源又光りである事を夫々の分野に高らかに止揚致したく思ひます。

應召中の村林兄は中支より通信がありまして私共の贈つた日章旗が毎日異つた感じを與へてくれる諸兄より魂の便をくれと訴へて來ました二部から法學部に行つた伊藤正規兄も暑休中應召しました。

「天地は過ぎゆかん、然れど、我が言は過ぎゆくことなし」(マタイ傳二十四ノ三十五)九月集會は十五日(金)午後八時より第三十八號教室にて開きます。御出席下さい。

(法三橋詰)

應召學兄部隊名

伊藤正規君 旭川市第二十六聯隊濱上部長加藤隊第一内務班

村林長次君 中支派遣軍第二渡河材料部

隊谷垣部隊隊醫室

戰線より

専門部教員 久保田作平

職員生徒の勤勞奉仕作樂誠に御苦勞にて肉體的精神的に生徒の體得は頗る貴重なるもの、又如何に銃後學生生徒の認識が實行化せられあるを承り、目頭の熱するを禁じ得ず、各位の勞苦に對し深甚の敬意を謝意を表します。就職狀況も好成績の由之れ又結構です。

一當地は今稻刈つてゐます、二回目を植ゑて相當茂つてゐるのがあります。平地は到る處棉又棉で、豆も其の畑の周圍に作られてあります。米と小麥、棉花は主産物でせう。平地の方の土人は日本軍歡迎で逃げません、割合に清潔なものを着て居り、よく洗濯をやつてゐます。子供はどこへ行つても實に多い、そして人なつきがよい。學校のない處が多い山間では文字を知らない奴が多く、筆談が出来ぬのは支那語の出来ない吾人には何よりつらいです。支那人は何を運ぶにも殆ど擔うて歩く、三里でも五里でも咄道を平氣で歩く、夜は夕方から夜明け近く迄は絶対に歩かない。酒に酔つたのを見た事もない。燈火は上等のところはランプで、村中でも數へる位しかない。皿に種油を入れ、御燈火見た様なのが大分、土壁の家屋では光は外に出ない、立並ぶ小さな町でも道路は暗やみと云ふ合合だから、夜間の行動は非常管制の時同様で、道が細くて悪いだけ、又それが曲り曲つて三里の圖上で、五里位はある、山間は殊にさうです。此の頃では附近の色々な事情が大體判りました。支那人には油断は出来ません、殊に便衣の敵匪は潜行が自由ですから、見張の歩哨でも、同じ服装の奴が多い位です。全支の肅正は相當永い日時が要るでせう。聖戰目的達成は將來軍民一致の大事業と存じます。(下略)

北滿より

中村 興

母校關西大學卒業生の近時各方面に發展活動しつつある様子を聴く度に肩身が廣く存候滿洲に於ても近時随分卒業生が来て居り其の多くは實業界に活躍せられて居る模様候小生新京に在勤當時に於ては治安部興安科の菊地宗三郎先生を中心として卒業生會合せし事あり専門部第一部卒業にて小生より一年先登の天野さん(現在治安部勤務)千里山の教官たりし吉村先生(關東軍勤務)大北君(協和會勤務)等とも親しく會合する機會ありて淋しい乍らも同窓相助け合ひ候只今大同學院には千里山出身の藤田君(大同學院第六期)が助教をして居り第十三期生として母校より二名在學中に候之で母校より大同學院に入りたるもの藤田君と同期の鈴木良君と合せて五名に候、降つて小生今度北邊振興兵站基地として新設せられた北安省の開拓廳開拓科へ轉勤を命ぜられ去る五月より北安省開設の籌備員として政策部門を擔當して其の準備を進め六月一日の開廳と共に現地北安に來り未開の北安街の一角假廳舎バラツクの中で仕事を開始し住居も皆單身ホテルに合宿中に候従つて小生も只今家族は内地へ歸し背後地とは雖も前線とは同じき北安にて廣義國防の充實に努め居り候小生の仕事は我が國三大國策の一たる開拓國策を擔當致し北滿に於ける未利用地を整備し一日も早く一人でも多く主として日本開拓民を招致し眞に民力の振興に基く兵站基地の充備を急ぎ居り候現在既に第八次迄の開拓民入植致し居り各理想農村を營み居候今夏は日本より學生青年團より成る滿洲建設勤勞奉

一國隊の入所あり只今省及縣は之が種々斡旋に大童に候大體に於て豫期の成績をおさめ居候  
盛夏とは雖も北滿の朝夕はうすら寒い位に涼しく  
全くの避暑地に候併九月の末には凍るとの事此の分では冬の寒さが思ひやられ候(下略)

法理研究會の結成

二部法科學生の綜合的學術討究機關として法理研究會は去る七月五日(水)天六學舍第廿六教室に於いて正井専門部長、和田、柳瀬兩教授臨席の下に發會式を擧げ、輝かしき明日への前進を開始した。云ふまでもなく現下に於いて社會の凡ゆる體制は新しき指導原理の照明下に全面的な批判修正を餘儀なくされる歴史的時間に遭遇してゐる、——政治も、經濟もそして法律も。實定法組織の完全無缺性を信じたのは近視眼的法學徒の哀れむべき白日夢でしかなかった。今こそ吾々は此の概念法學の衣を潔く脱ぎ捨て、激しく動搖する現實に深く沈潜し自由なる思索を以て明日の歴史を創作すべき新しき法理念の探究に自己を没入して行くべきであると信ずる、斯る抱負と使命を意識しつつ、誕生したる法理研究會に對し學生諸君の絶大なる支援を深く期待する。

尙本年度役員左の如し、

- 會長 正井 教授
- 指導教授 和田、柳瀬、木村、中谷、川上、野村、安藤、武田、植田、吉田の諸先生
- 委員長 法三 野 尻 義 正
- 副委員長 三年 金 野 昌 體
- 同 二年 加 藤 市 郎
- 同 一年 浦 邊 一 郎
- 同 三年 渡 邊 秀 雄
- 同 二年 浦 邊 秀 雄
- 同 一年 浦 邊 秀 雄
- 研究部主任 同 三年 浦 邊 秀 雄
- 企劃部主任 同 三年 浦 邊 秀 雄
- 總務部主任 同 三年 浦 邊 秀 雄

# 校友會費拂込者氏名 (其の七)

一時拂 (五拾圓)

昭和三十五年會費

昭和三十四年度會費 (參閱)

高野 時治	芝野 英太郎	山路 岩雄	片山 義忠	馬淵 錦八	藤原 喜一	高田 正文	林 義男	以下次號	小林 真夫	森脇 道尾	中川 政人	住田 豐次	磯田 英夫	前川 春惠	大野 玉夫	野田 房郎	新田 武助	中務 平吉	藥師寺 一橋
小野 塵一	田畑 留七	關田 岩喜	大塚 義明	麻中 信好	小澤 梅吉	矢野 兼三	武田 晴夫	井岸 哲也	丹原 純二	藤永 正三	名越 日月	木村源之助	仲野道之助	川島 多一	山田 太熊	沖原 五男	北 允晴	藥師寺 幸夫	
武田 木聰	森田 次郎	岡田 安之助	飯内 新一	荻田 高二	西田 貞雄	渡邊 茂春	安城 俊一	横谷 純一	長尾 景平	赤木 輝夫	大森 吉太郎	水本 信夫	山本 貞龍	廣末 義生	川越 茂樹	西村 泰之	猪飼水太郎	由井 鶴雄	
小平 彦太郎	末廣 清吉	岡田 安之助	堀内 新一	大西 勇	辻野 昇	岩崎 三郎	新毛 倉次郎	幸田 元治	上田 吉太郎	福富 重治	名越 日月	木村源之助	石川 彦作	廣末 義生	川越 茂樹	西村 泰之	猪飼水太郎	由井 鶴雄	
高野 時治	芝野 英太郎	山路 岩雄	片山 義忠	馬淵 錦八	藤原 喜一	高田 正文	林 義男	以下次號	上田 吉太郎	福富 重治	名越 日月	木村源之助	石川 彦作	廣末 義生	川越 茂樹	西村 泰之	猪飼水太郎	由井 鶴雄	

大正十一年七月十五日創刊  
 昭和十四年九月十五日印刷  
 昭和十四年九月十五日發行

編輯 神屋敷 民藏  
 印刷所 谷口印刷所  
 發行所 關西大學學報局

天六學舎 大阪市東淀川區長柄中  
 本部電話 三〇三九  
 本館電話 三〇三九  
 寄附電話 二六七五  
 千早山學舎 大阪市外千早山  
 本部電話 吹田四六二一  
 寄附電話 吹田四六二一

關西大學教授

磯部喜一著

# 中小商工業の組合運動

四六判 二二七頁  
定價・壹圓  
送料・拾錢

著者序文より―日支事變を契機とした戰時經濟の招來以後、吾々は幾多の新しい經濟問題に遭遇してゐる。組合制度もその一つであるが、實に組合制度は今日わが國民經濟機構の樞軸たらしめられてゐるのである。こゝに於いて、吾々は組合運動の本質を知らないでは、今日のわが國民經濟を談ずる資格をもたない。組合運動の理解に當つて困難がある。蓋し組合制度は一つでなく、多數に上つてゐる。しかも現行多數の組合制度は戰時經濟機構として新に創設されたのでなく、殆ど大半が既存し、今日重用乃至轉用されたのである。それだけに、それぞれがもつ過去及び傳統を知らねばならない。

著者は昭和十一年の秋『工業組合論』を上梓したが、この前後から他にも數種の組合研究書乃至組合解説書が刊行された。ただ遺憾なことに、各種の組合制度を關聯的に取扱つた書物は一冊も見出せないのである。著者が再び組合論のため筆をとつた所以は、この缺陷を補ふにあつた。本書は、明治以來での最古の組合制度である準則組合から、今日の組合運動の花形である工業組合・貿易組合及び商業組合まで、産業關係の各種組合制度を關聯的に考察した。もとより、この考察に當り、自由經濟・統制經濟乃至戰時經濟に於ける社會的重要性の變遷を指摘する用意を怠らなかつた。最後に、本文校正中に工業組合制度の改正があつた爲、できるだけ本文の訂補に力め、なほ附章を追加してその完璧を期することにした。

## 最新刊

好評

磯部喜一著

# 工業組合論

菊判 七五〇頁  
定價 六圓  
送料 三十錢

關西大學學報 第七十二號 (昭和十四年九月十五日發行)

大阪東區長柄通 大替番二五六〇

# 甲文堂

東京市神田區錦町一十一番 大替京東三七八一